

令和8年度 第2回 学校運営協議会 議事録

日程：2026年5月29日(金)

時間：15時30分～16時40分

場所：第六中学校／第一応接室

参加：(委員)9名 (事務局)1名

進行：担当委員 記録：担当委員 文責：担当委員

報告・協議

1. 新年度を迎えて二ヶ月の様子(校長)

- 子ども主体の活動と特色ある取り組み：今年度も「子ども主体の活動」を重視して動いている。学校だより5月号にも掲載の通り、「哲学対話」や「グリーンハロープロジェクト」といった六中ならではの特色ある活動が継続してうまく機能している。
- 生徒の様子：1・2年生は非常に明るくのびのびと過ごしている。3年生は、これまでの良い明るさを保ちつつ、最上級生としての落ち着きも備わってきた。
- 修学旅行の実施(春季開催への変更)：
 - 調布市内では六中のみ、今年度から修学旅行を「春(5月)」に前倒して実施した。
 - 変更の主な理由は、9月・10月の猛暑による熱中症リスク(昨年度は帰宿後に生徒が倒れ込むほどの暑さだった)と、台風による交通機関の足止め・中止リスクを回避するためである。
 - 春の京都・奈良は国内外からのインバウンド(観光客)で極めて混雑しており、特に土日に重なった奈良公園や清水寺周辺は前に進めないほどの混雑であったが、体調不良者を出すことなく無事に帰着できた。校長としては今後3年間はこの春季開催を継続する方針である。
- 防災教育の日：「風の電話」に関するドキュメンタリー動画を編集し、生徒に視聴させた。多くの生徒が涙を流しながら真剣に見入っており、保護者からも大変好評であった。

2. 1. に関する質問・提案

- 修学旅行の時期決定の仕組みについて：
 - 修学旅行専用の貸切列車(集約列車)を利用する場合、東京都中学校長会の修学旅行担当を通じて、該当の3年生が1年生の1学期中に時期(春・秋)の希望を出す仕組みになっている。その後、抽選によって日程が自動的に確定するため、学校の希望で日程を選べるわけではな

い。2学期に保護者交えて業者プレゼンを行い、決定した後に詳細な宿などが決まる。現在、1年生の分の希望は提出済みである。

- **修学旅行の行き先・コースについての提案:**

- 京都・奈良のインバウンド混雑を避けるため、他の歴史文化を学べる地方(金沢、広島、東北、あるいは飛行機利用の沖縄や九州など)は選べないのか、また「地方の現実」を都会の子どもたちに知ってもらう意義もあるのではないかとの意見が出された。
- 新幹線利用で130名規模の団体が班別行動を効率的に行える代替地が少ないこと、地方での農業体験などは雨天時のプログラム維持が極めて難しいこと、また飛行機は130名の命を預かるリスク判断から慎重にならざるを得ない現状が共有された。また、行き先を大きく変更する場合は新入生説明会などから長期的な周知・合意形成が必要であり、急な変更は難しい。
- 混雑を避ける穴場スポットの選定や、京都に近い滋賀県(比叡山など)、伊勢、あるいは過去に実績のある東北(盛岡・十和田湖など)を絡めるアイデアなどが提案された。

- **修学旅行の事前・事後学習について:**

- 事前学習は班ごとに調べる社寺を決定し、3年生の廊下に成果物が掲示されている。
- 事後学習については、ジュニア研修部のアイデアにより、総合的な学習の時間でプレゼンを行い、それを2年生が見学して来年度への心構えを作るという学年間の交流が計画されている。

- **グリーンハロープロジェクトについて:**

- 新たに作成した「のぼり旗(6本)」が非常に目立ち、登校する生徒たちとの良いコミュニケーションツールになっている。生徒の参加(トングの利用)も予想以上に増えており、資材が不足するほどの盛り上がりを見せている。
- 本活動は、地域(地区協など)からも「中学生が毎月大きな声で挨拶をしてくれて素晴らしい」と認知されており、地域の大人側にも生徒を見かけたら声をかけるよう働きかけている。
- 今後はゴミ拾いだけでなく、夏に向けて歩道と緑地の間の草取りなどへ活動をシフト、あるいは仕組みを工夫していく余地がある。

3. 六中学校運営協議会、今年度の目標提案

前回出し合った委員の思いを基にしてまとめたスローガンと3つのビジョンが提案された。

- **スローガン:**

「Make Your Color ～共に育み、共に深める地域の学び舎～」

- ビジョン：
 1. 学校の主体性を守り、教育に専念できる環境の提供
 2. 生徒が主役となり、地域とつながる参画型運営の構築
 3. 「対話」と「探究」を軸とした地域の学び舎の実現

4.3. に関する協議

- ビジョンに対する賛同：「教育に専念できる環境づくり、生徒と地域の繋がり、学校ベースのコミュニティという3つの軸は非常に素晴らしい」と高い評価と賛同が得られた。
- 学校を取り巻く現状とAIの影響：
 - 最近、全都的に保護者からの意見・要望が「専門化・複雑化」しており、AI等を用いて法的な文言を巧みに使ったメール等が教育委員会や学校に届き、対話を拒否する事例が増えている現状が共有された。
 - 背景として社会全体の対話不足や分断があり、学校におけるトラブルを対話で解決せず、即座に法的な手続きに持ち込んだり一方的な要求を繰り返したりするケースが増えている。
 - もはや学校単体での対応には限界があり、スクールロイヤーなどの仕組みの拡充を求めつつ、本協議会としても学校が本来の「対話を基調とした子どもの成長の場」であり続けられるよう、原則的な立ち位置を共有して支えていく重要性が確認された。
- 複合的施設や地域連携の未来像：
 - 委員より、全国的に学校内に包括支援センターや児童養護・高齢者デイケア施設を複合させる事例が増えていることが紹介された。
 - 可能性は検討すべきだが、理念(六中の基盤である人権尊重や対話の精神)が明確でないと、本来あるべき姿から外れることが懸念される。この3つのビジョンのように拠って立つべき理念を常に明確にし、共有しておくことが、本校のよさを失わないために重要である。

5. 行動計画の策定

目標の具体化に向けて、無理のない範囲で地域資源を巻き込むスモールスタート(プロジェクト制)の取り組みが提案された。

- 校内資源の活用(梅ジャムの例)：
 - 学校の敷地内に実った梅を地域の方に提供したところ、梅ジャムにして届けてくれたエピソードが共有された。
 - これをヒントに、今後は地域の方を講師に招いて子どもたちと一緒に梅ジャムを作るような、自然な形で地域交流のアイデアが出された。

- 「ひだまりサロン」の中学校内展開：
 - 社会福祉協議会から要望のある、高齢者の居場所づくり(ひだまりサロン)を月1回程度実施するアイデアが検討された。
 - 単なる高齢者の集いにとどまらず、「中学生と交流できる」という学校開催ならではの強みを活かし、音楽の授業での交流、国語の授業での俳句大会の審査員としての参加など、授業や休み時間を活用した発展的な多世代交流の可能性が話し合われた。
- 運営の仕組みと窓口：
 - 窓口をすべて校長や特定の教員に集中させると教職員の多忙化を招くため、窓口は地域学校協働本部が担うことが考えられる。
 - 地域学校協働本部の負担も考慮し、現役の保護者と協働本部がうまく連携し、役割を分担できる仕組みを構築していく。
 - 組織を最初からきちんと作ろうとすると運営が厳しくなるため、まずはトライアル(エラー許容)として、単発のプロジェクト形式で小さな実践を積み重ねていくことも考えられる。

連絡

次回(第3回)学校運営協議会の日程

- 7月17日(金) 15時30分～

以上